



トラウマ、心の津波
被災地ボランティア記⑥

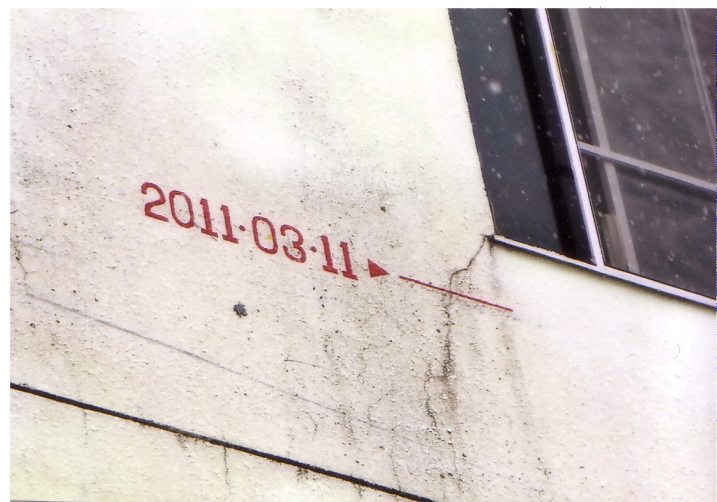
初日の訪問先は五十
九世帯が住む大槌第七
仮設住宅。前夜、大槌

町のベースキャンプに
着いた時は真っ暗で周
囲はほとんど見えな
かった。翌朝、仮設住宅
に向かう車内から見る
風景は、小雪に覆われ
た一面の平地。被災前
はこの辺りは住宅が建
ち並んでいたという。
車内に何ともいえな
い緊張感が漂う。特に
私のような初めて被災
地を訪れた者にとって
は余りに衝撃的な光景
である。私たちが泊ま
った四階建てのベース
キャンプの建物には、
三階の窓下の外壁に赤
字で「2011・03
・11」とある。ここ
まで津波が達したの
だ。私が寝た部屋は二
階、昨夜、津波に襲わ
れていたら多分死んで
いただろう。真昼の津
波であったにもかかわらず
町民の十一人に一人
が犠牲になったとい
うから津波のすごさが
わかる。



かつての繁華街に建物はな
い

メイン道路は舗装さ
れている。その大通り
から舗装されていない
小道に入り、しばらく
走ると仮設住宅の集会
所に着く。「お茶っ子
サロン」と呼ばれる、
被災者とボランティア
との交流会が始まるの
は午前十時。まだ多少
時間はあるが誰も来て
いない。
十四畳ばかりの集会
室で準備を終え、被災
した人たちが来るのを
待つ。ポツリポツリと
老婦人が来られる。五
十九戸だからと五十九
個のクリスマスケーキ
を持ってきたのだが、
想像よりも少ない。



3階の窓下まで津波は襲ってきた

せつかく本州の西の
端から十三人もが新幹
線を乗り継いで一日か
けて来たというのにと
いう気持ちがよぎる。
そういえば、夏に来た
人たちの体験集の中
にも、集会所に来る人
が少なかったという文
章があった。
集会所の壁一面にボ
ランティアグループが
書き残したメッセージ
が張ってある。大きな
「希望」という字が目
に入る。ふと、今、仮
設で生活している人
たちはどんな希望を持
ているのだろうかと思
える。
戦争中の出来事では
ない。平和で、平穏な
生活をしてきた時、突
然津波に襲われ、肉親
を、住む家を、すべて
の財産を奪われた。パ
レスチナのトラウマ
（精神的外傷）を負っ
た子どもたちが頭に浮
かぶ。
目の前で戦車で自分
の住む家が壊された
り、肉親が砲撃で死
ぬ。子どもたちは長い
時間をかけてそのトラ
ウマのケアを受ける。
娘はパレスチナでその
手助けの仕事などをし
ており、私もパレスチ
ナに行ったことがあ
る。
私はトラウマは紛争
地の子どもたちだけの
ものと思っていた。そ
うではない、今、この
仮設住宅に住む多くの
人たちもまた「心の津
波」というトラウマを
負っている。だから神
父は何回もここを訪ね
ているのだろう。
トラウマのひどい人
は集会所に出てくるこ
とさえ負担になってい
るのではないか。集会
所に来る人の人数が少
ないと思った自分を恥
じた。たった一人でも
よい、そのような気持
ちの被災者の手助けの
ために来たのだ。



集会所のたくさんのボランティアたちのメッセージ